

20107

LVAS が極めて有効であった大動脈閉鎖不全症合併急性大動脈瘤破裂の一救命例

¹福島県立医科大学

山本 晃裕¹、横山 斉¹

【症例】 生来健康な 29 歳男性。サッカーの試合中に転倒し前胸部をグラウンドに強打し受傷した。近医に救急搬送され、心電図で広範な ST 低下、心エコーで高度の大動脈弁逆流、胸部 CT で上行から弓部大動脈にかかった大動脈瘤破裂が認められ当院に搬送となった。来院直前に心停止となったため、心臓マッサージを行いながら右鼠径部より V-A ECMO を開始し、緊急手術となった。【手術】 体外循環下心停止とし上行大動脈を切開すると内膜が完全に離断し、大動脈弁を超えて左室内に嵌頓して高度の大動脈弁逆流を生じていた。左総頸動脈までの部分弓部置換術を行ったが、体外循環から離脱困難となったため、左室の後負荷軽減目的に心尖部脱血、弓部人工血管送血の左心バイパスを装着して手術を終了とした。【術後経過】 3 日間の左心サポートを行い、徐々に心機能の改善を認めたため LVAS 離脱と胸骨閉鎖を行った。離脱後より鎮静薬に起因すると思われる悪性症候群も発症し血漿交換療法 4 回と人工透析を実施した。その後は 4 週間かけて透析からの離脱を行い、術後 52 日目に独歩退院となった。【考察】 LVAS による左室後負荷軽減によりスムーズな心機能の回復が得られ、悪性症候群や腎不全に耐容できたものと考えられる。【結語】 LVAS が極めて有効であった大動脈閉鎖不全症合併急性大動脈瘤破裂の一救命例を経験した。本症例のように急性左心不全の回復を目的とした LVAS は有用な治療手段であると考ええる。

日時 月 日 (第 日)	セッション	会場	時 分～ 時 分
--------------	-------	----	----------

受付番号

演題番号